

AJELC Newsletter

The Association for
Japanese and English Language and Culture

第67号 2024年4月30日

---目次---			
巻頭言	福永 堅吾	1 第85回例会報告	藤吉 大介 15
会長つれづれ考	小川 貴宏	3	橋 広司 16
第84回例会報告	山田 留里子・佐野 予理子	5	杉本 真紀子 18
	鈴木 誠	6 事務局だより	19
	東田 孝昭	8	

母語とともに生きる ― アーレントの場合

福永 堅吾

院生のころ、ハンナ・アーレント(1906～75)が英語で書いたテキストを読んでいて、自らの英語力のなさを痛感しながらも「なんだか読みづらくないか」と感じた。おなじ本の序章はアーレントとは別の人が書いたものだったが「ああ読める英語だ」とちょっとホッとした。書いた人がちがうのだから、書かれた英語にちがいはあるのは当然だが、それにしてもアーレントの英語は、ふだん読み慣れていた英語とはちがう。

映画『ハンナ・アーレント』(2013)にも、彼女の英語にまつわるシーンが少しだけあった。発表後に大論争を巻き起こすことになる「イェルサレムのアイヒマン」(1963)を連載する『ニューヨーカー』の編

集長が、彼女の英語の原稿を読みながら「文法がなあ…」とつぶやいた。やはり「読みづらい英語」という感触は、あながち独りよがりでもなさそうだ。

ここ数年、勤務先の研修日に母校の学部・院共通のゼミに参加させてもらい、20世紀以降にドイツ語で書かれたテキストを読んでおり、いちばん最近に読んだのはアーレントの「独裁政権下における個人の責任」だった。もとは英語で書かれ、のちにドイツ語にも訳された。この原稿の英語は、とてつもなく長い。主文から読みはじめると、接続詞、関係詞、ドイツ語の冠飾句のような長い形容詞句、また接続詞があって、副詞句、関係詞句、そして接続詞が

出てきて新たな文がはじまって...とひたすら続く。長いものでは10行ほど読み進めないとピリオドがこない。長い英文ではあるが、わからない英語ではない(もっと簡単に言ってほしい!と思うところは多いが)。アーレントの頭のなかにある言いたいことを、一文で、一息で言ってしまう。しかも、理路整然と。そんな熱を感じさせる文である。

ユダヤ人の彼女は1933年、「暗い時代」のドイツから逃れ、フランスに亡命した。そこでは流暢なフランス語を身につけた。ときにギリシャ語、ラテン語をも織り交ぜて考えるこの政治哲学者には、言語の習得など取るに足らないことなのだろうが、意外にも英語を習得しはじめたのは、1941年にニューヨークに渡ってからだという。しかし、例えば「アイヒマン」の連載は、英語をはじめから20年は経っている。短期間しか過ごさなかったパリですらフランス語を身につけた彼女が、英語で苦労したとは考えがたい。

「アーレントの英語は読みづらい」。じつはそう感じさせるのが彼女にとっては「正解」だったようだ。1975年、晩年の彼女に贈られたある賞の受賞スピーチにそ

のことが述べられている。亡命者たる彼女がなんとしても失うまいとしたのは、母語のドイツ語だった。ドイツ語こそ、アーレントがアーレントたる所以と心得ていた。だから、あえて英語が母語よりも上手くならないようにすると「決意した」のだという。

母語とどう付き合っていくか。日々接する学生にとっての母語は、どのようなものなのか、と考える場面がときおりある。英語教員である以上、ふだんから学生の英語を添削する機会が多いが、日本語で書かせたレポートを読んでいると、奇妙な日本語に出くわすことがある。かれらが日常的に口語として使っているが、一般には書き言葉として定着していないような表現を使っている。添削すると、ともすると英語の添削よりも真っ赤になることもある。アーレントは「考えなくては」とよく言った。英語も大切である。だが、母語をどう使っていくか、いちど学生に考えさせたいと思いつつ、新年度の準備に慌ただしく時間を過ごす年度末である。

(東京都立産業技術高等専門学校 准教授)

会長つれづれ考

私の故郷・三重

小川 貴宏

今回は私が生まれ育った故郷・三重について書かせていただこうと思う。私は東京外国語大学(その当時は今の府中ではなく、北区の西ヶ原にあった)に入学した18歳から上京しそれ以来東京に住まわせていただいているが、現在も田舎には母が1人で暮らしており、2か月に1回ほどは母の顔を見に帰省をしている。本稿を書こうと思ったきっかけは、昨年(2023年)秋の連休にたまたま同じ成蹊大学理工学部の同僚の先生方(女性1名と男性私を入れて3名)が、お伊勢参りをしたいと私の故郷に2泊3日で来てくださり、とてもいいところだと言ってくださって単純な私は気をよくしたことである。三重と一口に言っても、江戸時代までの国割り(旧藩制度)でいうと伊勢・伊賀・志摩および紀伊の東半分の4つの国からなり、それぞれ文化もことばも異なっている。ただ、ことばは東西の境目の木曾三川を越えたところが三重のため、基本的には関西弁である。(食文化などことば以外の境目(たとえば出汁の濃さや餅の形など)は、もう少し京寄りの関・亀山あたりだと言われている。)

私の生まれは伊勢の国の松阪市であるが、幼稚園くらいから父の実家のある(松阪市から橋を渡って歩いて3分(!)の)多気町に移り住み、それから15年ほど多気町民として過ごした。実家はちょうど江戸時代の大阪・京都方面から歩いてお伊勢

参りをする「伊勢本街道」上の櫛田川ベリの渡し場の宿場町で、実家も江戸時代は宿屋をやっていたそうで、子供時代はまだ宿屋時代の100年来の年季の入った、宿の部屋や土間、そして蔵のある建物で暮らしていた。当時まだ居間の引き出しには江戸時代からの直方体の木の枕がごろごろと入っていた。実家の建て替えの際にすべて捨てたそうだが、今のフリマアプリの時代なら多少の値がついたかもといささか惜しい気がしている。

実家の在所(集落)の一軒一軒には宿場町だったころの名残か、屋号がついており、集落内に小川(こかわ)がたくさんいることもあり、うちの実家も「油屋」という屋号で今でも他の家と区別されている。

生を受けた松阪市は、おそらく皆さんにとっては「松阪牛」でお聞きおぼえのある街だと思うが、文化的にも本居宣長や小津安二郎の故郷だったり(それぞれ市の中心街に記念館がある)、また産業的には商業の街で旧財閥や三越で知られる三井家の発祥の地だったり、古い町並みが残っていたり、落ち着いた見どころの多い街である。

私自身は小学生のころから半田ごてを握って、ラジオを組み立てていたようなラジオ少年で、当時将来はオーディオ技術者になることしか考えておらず、中3の時に県内の国立鈴鹿高専電気科に受かって意

気揚々としていたところ、教師や両親に「高校出てからもう1度考えてみたら？」と説得されてまあそうかなと思い県立松阪高校に進学した。ところがそこで東京外語大出身の山水(さんすい)先生という風雅な名前の先生に出会い、英語の面白さを知ってしまった。高校まで40分のバス通学の行き帰りに小川芳男先生の当時新書3巻で出ていた『巷の英語』にハマって何度も読みふけり、自分の住む世界の外にはこんな面白い世界があるのかと完全に引き込まれた記憶がある。「井の中の蛙、大海を知ってしまう」である。

私が英語の世界に引き込まれた理由にはもう1つあり、それは良くも悪くも当時多気町が外国語や国際社会とはあまりつながりのない、一生英語や海外とは無縁で過ごせるのどかな農村地帯だったことである。そのような環境の中、私は逆に、私が15歳の頃劇場公開された映画『スターウォーズ エピソード4』の中で主人公ルーク・スカイウォーカーが外の世界へのあこがれを募らせたように、海外へのあこがれを膨らませていった。その当時、日本が高度経済成長真っただ中で、海外にどんどん進出しようとしていた時代背景もあったと思う。

今の時代は若い人たちがインターネットやスマートフォン、その他のメディアを通じて英語や海外事情などにいとも簡単に触れられる恵まれた時代である。私が学生だった時代は、ソノシート(皆さんご存じでしょうか?)やカセットテープで英語の音声に触れ、その当時登場したテレビの多重放送(二か国語放送)で音声を副音声(英語)にして、何と言っているか想像し

ながらわくわくしながら海外ドラマを見て外の世界にあこがれを募らせていた時代だった。英語や海外へのアクセスが限られていた分、サブカルチャー的に言うところ「異世界」へのあこがれを抱く度合いが今より強かったのかもしれない。

話を冒頭の昨秋の同僚の先生方との三重ツアーに戻すと、4人で多気町内のバンガローのようなところに2泊3日で泊まって、2晩にわたってそこでバーベキューをしたのだが、先生方が一番絶品だと言ってくださったのが松阪牛の「ホルモン」で、地元民の私もそのおいしさにびっくりした逸品だった。多気町内でも松阪牛は飼育されているのだが、おそらく地元の新鮮な素材が提供されたものだったのだろう。皆様もちろん有名な観光名所の旅((伊勢)神宮がそれに当たるだろうか)にまず行かれると思うが、それに加えて本当に何もなかったところでのんびりされると、そこでも新たな発見があって忘れられない旅になるかもしれない。

母親ももう年齢89を数え、私もそろそろ三重に帰ってあげなければと思っているのだが、70年近く多気の文化の中で暮らしている母とは違い、40年以上多気を離れている自分はなかなか今から地元溶け込めないのではと危惧している。田舎の人間関係は東京のそれと比べて何倍も難しい。それに加えて、地元には必須の「物々交換の文化」があり、戻ってもその肌感がわからずに人付き合いがうまくいかない恐れ、あるいは「やっぱりあの人は東京の人やなあ」と言われる恐れもある。田舎は外と中を厳密に分ける文化である。それは自分たちの計り知れないものを畏怖する

ところから来ているのだと思う。文化は国内の地域や世界の国々ごとに違い、研究対象としては興味が尽きない。しかし文化を当事者として身にまとうのはあまりにも「難しい」し、それまで自分がまとってきた文化を捨てる覚悟が必要である。母の元

気なうちに、できるだけ多気町民としての生き方も母から学んでおきたいと思う。母にはまだまだ元気でいてほしい。

(成蹊大学教授)

第 84 回定例研究会報告

2023 年 12 月 9 日 (土) 14:30 – 17:00

於：成蹊大学 と Zoom ミーティングでのハイフレックス

研究発表

中国語授業における中国文化とグループ学習導入の実践 —LMS と反転授業を活用して—

山田 留里子・佐野予理子

この研究対象科目の本学部における位置づけは、3 年次「プロジェクト科目」における課題解決型学習へ繋がる科目である。よって、授業目標としては「中国語力」に加え、「中国語理解や異なる意見に耳を傾け他者と協力する力などの獲得」とした。授業形態としては、「質的保証」としての対面授業と、「量的保証」としての LMS 活用による事前・事後学習を導入し、テキスト以外に中国語と中国文化的背景を連動させたオリジナルの副教材を作成し(2021 年開学サービス)、活用した。本研究の対象は、コミュニケーション中国語(14 回 100 分 選択専門科目 2 単位)を受講する人間共生学部コミュニケーション

学科 35 名で、実施時期は 2022 年 9 月～2023 年 1 月であった。履修生の構成としては、春学期より継続して受講する学生は 21 名、未履修生 9 名、留学生 5 名であるため、1 グループに 1 名の留学生を配置し、5～6 グループで編成した。事前アンケート調査を行ったが、履修生が苦手とする項目として、「中国語の文法とコミュニケーション」が上位を占め、また履修動機に関する項目では、「中国語力、コミュニケーション、資格」など、両者がパラレルな関係であることが明らかであった。LMS としては、コンテンツ機能、レポート機能、個別コレクション機能を履修生に積極的に活用してもらえるように編成した。

さて、教育効果の検証については、授業日当日までに LMS 機能にアクセスしている場合を「早い」、授業日翌日以降にアクセスしている場合を「遅い」と定義し、1 回目授業から 6 回目授業までのそれぞれのアクセス回数と試験成績の関連について検討を行った。1 回目授業から 6 回目授業まですべての授業回で、アクセスが「早い」受講生よりアクセスが「遅い」受講生の方が多かったが、授業回ごとの試験成績についてはアクセスが「早い」受講生の方がアクセスが「遅い」受講生よりすべての授業回で試験成績が高かった。最終試験成績が 90 点以上だった受講生 8 名を成績高群($M=94.25, SD=3.37$)、70 点未満だった受講生 7 名を成績低群($M=60.29, SD=5.53$)とし、授業回ごとの LMS 機能へのアクセス数の推移を比較した。1 回目授業では成績

高群も成績低群もアクセス回数は同程度であったが、2 回目授業以降は成績高群に比べ成績低群の方がアクセス回数が減少する傾向があることが示された。

今回の教育実践においては、対面と LMS 活用の特徴を活用して、苦手意識の克服にも繋がったものとする。今後の課題としては、「苦手意識の克服」がどのようになされていったのかを、LMS へのアクセス状況との関連性から分析考察していきたい。

なお本研究は、文科省科学研究費助成事業（課題番号：22K00827）の助成を受けたものである。心より感謝申し上げます。

（山田 関東学院大学教授・
佐野 関東学院大学准教授）

研究発表

国際高校における高校生英語学習者の 英語表現力と高次的思考力の一考察

鈴木 誠

現行の学習指導要領の柱である「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養は、国際バカロレア (IB) の目指す学習者像とも重なり、IB の教育手法は学習指導要領の具現化の一助となり得るのではと考えました。IB の Teacher Guide には高次的思考力(Higher Order Thinking Skills: HOTS)を問うことで具体から抽象の思考へと向かわせることが期待できるとの言及がみられます。

本発表では、高校生英語学習者を対象に HOTS のトピックを含むエッセイライティングを課し、その結果について報告しました。エッセイライティングは、本の登場人物と自身を重ねて、共通点や類似点について具体的な例を挙げて説明するというものでした。ライティングのトピックは TOEFL のエッセイライティングのトピックより HOTS の 'Analyzing' に分類される問いを選びました。TOEFL テスト作成元である ETS

の Learning Management System (LMS)である Criterion を活用してエッセイライティングの採点結果（埼玉県の国際系公立高等学校在籍の1学年普通科230名と外国語科79名の合計309名）を分析したところ、普通科と外国語科間における取得スコアの差異に統計的な有意差が確認された一方で、標準偏差の大きさ、最低点最高点の差異から普通科に比べ、外国語科の方がばらつきが大きいことが示されました。また、語数の比較において、外国語科の方が平均値も最多語数値も高い結果となりましたが、普通科と比べて中央値と最多語数の差が大きく、一部の生徒の語数が極端に多いことが要因であるとわかりました。テキストマイニングツールを用いた3名の生徒のエッセイの分析では、高校生英語学習者の HOTS のトピックに対する英語表現力が垣間見えました。

また、本発表で対象とした国際系高校に在学する普通科と外国語科の生徒たちの特性や英語使用環境、国際系高校への志望理由、将来への意向などのアンケート調査の結果を考察しました。普通科では「立地」と「学力」が、外国語科では「外国語」と「国

際高校」の2項目が選択の決め手になっていることが明らかとなり、入学後の行動にも大きく影響があることが推察されます。英語使用環境については学校の授業以外で英語でニュースや音楽を聴いたり、発信したりする、といった課外活動での使用度が、外国語科生徒において有意に高いことも示されました。さらに「オンライン英会話」や「英語の曲や映画」、「海外の動画」、「洋楽」という個人的に行う行為や趣向が多い普通科の傾向に対し、「チャットで海外の人と話す」、「ホームステイ」、「海外研修」といった、英語を用いて他者と交わる行為が挙げられている外国語科という差異も確認できました。

国際系高校の生徒は海外留学を視野に入れている生徒も多く、今後は、留学で必要とされる英語運用力についても検証し、教室や普段の授業で HOTS を促す問いかけやタスクを盛り込みながら、HOTS を高める工夫をしていきたいと考えています。

(埼玉県立和光国際高等学校教諭)

講 演

オーストラリア在住 30 年 移民社会変化と日本人として思うこと

東田 孝昭

日本人としてのありがたさ

オーストラリアに移住した 1990 年代前半、オーストラリアの教育界では、アジアの言語を、伝統的なヨーロッパ言語に代わって教えることで、アジアの文化を理解し、経済的に発展するアジアに近い地の利を生かそうという大きな流れが起こっていた。かつての白豪主義からのアジア重視の大転換は、経済だけでなく、教育面にも見られた。

それは私にとっては幸運なことだった。当時日本語教師として永住権を申請し職を得ることは難しく無かった。またソニーやパナソニックだけでなく、三洋、東芝、など今では電機メーカーとしては存在しない日本の電化製品が溢れ、日本車は人気があり日本の漫画ブームも始まっていた。

我が家の近所や、子供たちが通った小学校、高校では、今と違いまだほとんどアジア系は見られなかったが、私たちは、子どもたちを含め日本人として珍しがられ、快適に生活することができた。

私自身日本人であるおかげで、比較的容易に職を得て、オーストラリアで家族を養いながら、今日までやって来られたわけだ。まさに海外に出ても日本の先人が築き上げた業績、恩恵の上に生活してきたと言える。日本人として生まれたことのありがたさを 30 年経った今でも思う。

ただ残念なのは、例えば 30 年前は日本の教員の給与はオーストラリアより良かったのに、日本政府の財政緊縮政策のせいか、その後 30 年間ほぼ日本人平均給与は変わらないどころか実質目減りし、雇用の不安定な非正規労働者が増え、消費税は上がり増税感も高まり、社会の貧富差が広がってきていることだ。

反対にオーストラリアでは、社会的格差の拡大は問題になりつつも、教員の給与は 1990 年代と比べると 3 倍上がり、平均所得は日本の約 2 倍以上となった

多様性からシチズンシップ教育へ

30 年前には、オーストラリアの学校のモットー（校訓）の中に「多様性」を取り入れているところが多く見られた。現在はそれが定着したのか、あまり聞かない。

時代が変わり我が子たちが 30 年前に通った学校は、現在、中国系、インド系、中東系がかなりの割合を占めるようになってきた。知り合いの教員によれば、今は「多様性」よりも、多民族の子女が、どのようにオーストラリアの法やルールを守りオーストラリアのシチズン（市民・国民）として、オーストラリア社会の将来を担うよう教育する、シチズンシップ（公民）教育に重点が置かれているとのことだ。「多様性」より、オース

トラリア国民としての「融合」と「統合」だろう。

オーストラリア在住の日本人コミュニティーは、国際結婚した日本女性が多いこともあり、オーストラリア社会に融合しやすく、その点は大きな問題はない。

それに比べて他の多くの民族は、移民の一世代、二世代では、同民族と結婚することが主流で、民族の言語、習慣、宗教、文化、アイデンティティーはそれぞれのコミュニティーの中で保持されやすい。しかし一方彼らにとっては、オーストラリア社会に融合し、オーストラリア国民として民主主義の価値を尊重し、規範を守り社会に参加して行くことが、大きな課題となる。

国家への忠誠と多様性～オーストラリア人ファースト

移民がオーストラリア国籍を取得するときに、オーストラリアという国家に対して忠誠を誓う儀式がある。出自が何民族であろうが、オーストラリア人になれば、オーストラリアの価値観を尊重し、オーストラリア国民としての義務と責任を持って生きることが求められる。

例えばイスラムの国々では、同性愛を認めず、厳しく罰する国もあるが、イスラム教徒であろうと、オーストラリアに住む以上、オーストラリアが認める同性婚や、ゲイの権利を尊重しなければならないことになる。

また日本人補習校のように、民族学校として州から認知され、補助を受ける機関は、州が主催する研修に教員を参加させ、州の決まりを守らなければ、教育機関として認められず、補助金はおりない。実際閉鎖されたイスラム系の民族学校もある。

オーストラリアは国家として、当たり前なことであるがオーストラリア国民が第一優先、私のような永住権者は二番目、外国人は三番目となる。

オーストラリア国民と永住権者の間には選挙権、公務員就労、高等教育奨学金など、さまざまな分野で権利において差別待遇は当然ある。また永住権は永遠の保障ではなく、場合によっては剥奪もある。外国人には原則として医療保険や生活保護は適用されない。

移民優先順位の変化～オーストラリアのニーズに合わせた移民政策

移民国家のオーストラリアは、誰でも移民を受け入れということではない。難民枠はあるが、不法移民、不法難民に対しては収容所、強制送還を含め厳しい方針で望んでいる。

毎年のように、移民の優先枠職業が発表され、オーストラリアが望んでいるスキルを持った人が優遇される。オーストラリアの都合、ニーズに合わせた移民政策ということになる。

これは、旧植民地国やアフリカ、中東から、はじめは労働者不足を理由に、また人道的観点から、移民、難民をかなり緩く受け入れた結果、現在、治安の悪化や、人種、民族の社会対立を招いている EU や、不法難民の流入に苦しむアメリカの轍を踏まないということだろう。

EU では次世代、次々世代になっても社会融合、価値観共有できない移民難民の存在が、大きな社会不安の要素として拡大し、時には人種差別犯罪、人種暴動などの事件も発生している。オーストラリアも EU ほど

ではないにしても、同じ火種を抱えている。

移民や難民は、家族、親族呼び寄せもあり、同民族が集中して特定のエリアに住むことが多い。次世代になって成功して、だんだんと他の地域に進出し、他民族と融合していくのが一般的だが、反対に次世代になっても、同民族が同地域に固まって住む傾向も強い。同民族が特定地域に集中して住み着けば、他の民族に対して排他的になることは否めない。

すでにシドニーやメルボルンのような大都市周辺では、英語を使わなくても生活できると言われる外国のような郊外もあり、時にはドラッグがらみの民族ギャング、組織犯罪の温床ともなっていると言われる。

多文化共生、多民族共生とか言われるが、実際、移民社会に生きていくと綺麗事ではすまされない。

多民族が共生する前提として、国家がきちんと機能して、明確なルールが必要となる。ルールを破れば罰せられる法治社会でなければ、多民族の共生は無理である。

オーストラリアで一般的に日本人が好かれる理由の一つは、おそらく小さい頃から他人に迷惑をかけるなど言われ育っている民族性か、無理な自己主張を通そうとせず、法やルールをきちんと守るからであろう。

オーストラリアは、アメリカ、EUなど他の移民国家と比べて、うまくいっていると言われるが、それでも次世代になっても宗教や価値観で融合できない民族、移民の存在は今後さらに大きくなるだろう。

方向や、やり方を間違えれば、国家、社会の分裂と混乱を招きやすい多様性、多文化共生の負の部分を実感して、多様性を尊重しつつも、オーストラリアは、改めて国民的

価値観の共有、オーストラリア社会への融合、国民統合の優先を打ち出している。

アボリジニー問題

オーストラリアの最大の課題は、先住民アボリジニーの問題である。

オーストラリア政府が彼らに市民権が認めたのは1970年代からで、それ以前は、驚いたことにアボリジニーには人権がなかった、白人はアボリジニーを人間としてみなしていなかったことになる。

19世紀の終わりの記録では、先住民をハント(狩る)という表現が用いられており、アボリジニーは狩猟対象の動物扱いであったことがわかる。白人の入植以来、虐殺や病気の蔓延でアボリジニーの人口は激減。

オーストラリアという国の出自は、アボリジニーの犠牲、虐殺と土地収奪の上に成り立った白人国家と言える。

私が移住した1990年代は、アボリジニーの権利や、彼らの伝統尊重は、国是となり、土地の権利補償、社会保障、教育、就職面の特別待遇など、さまざまな権利が認められ、アボリジニーの生活向上の政策が次々と実行されていった。

そして2008年、かつて全てを奪われ追いやられ、殺されていった先住民アボリジニー(ファースト・ネーションの人々)に対して、当時のケビン・ラッド首相はオーストラリア国民を代表して謝罪した。

今では、オーストラリアの全部の学校(補習校含めて)の集会、公の儀式ではその土地のアボリジニーの人々に対して謝辞を表明することが、開式のセレモニーになっている。

深刻なアボリジニー・コミュニティの現実

それでは、現在のアボリジニーの状況はどうだろう。

ここ数十年間、政府はアボリジニーの人々の生活環境改善、保険衛生、教育整備、住宅、学校建設、教員加配、特別奨学金などのために、莫大なお金を費やし取り組んできた。地域によっては土地の権利の返還もあり、アボリジニーの政治家や公務員、教員も増えた。

しかし、アボリジニーと他のオーストラリア人の平均寿命の差はまだ10歳以上と大きな開きがある。アボリジニーの失業率、犯罪率や刑務所への入所率などは高い。アルコールに極端に弱い遺伝体質を持つアボリジニーの社会に、白人の飲酒文化が入り、コミュニティをさらに破壊したとも言われる。

内陸のアボリジニー・コミュニティでも、今日伝統的な狩猟で生計を立てることはできない。かといって生活を助ける産業はないから、政府からの生活保護に頼ことになる。しかしそのお金はアルコールに消えることも多く、アルコールによる家庭崩壊、家庭内暴力、児童虐待などの深刻な問題も多発する。

生活保護に頼ることが2-3世代続き、親が働く姿を見たことがないという人がほとんどであれば、人間としての尊厳、プライドは失われやすい。そして自立精神がなければ、コミュニティの確立は難しい。

伝統的に尊敬されていた年長者が地域リーダーとしての力を失い、飲酒が蔓延し、崩れ去ったアボリジニー・コミュニティも

あるという。そうになると、子供たちは、親へのリスペクトをなくし、仕事もなくなつむろし、犯罪に手を染めやすい悪循環に陥る。

先日、オーストラリア中央部の拠点の町アリススプリングスで、10代のアボリジニーを中心とした若者、少年200人近くが、夜の街であちこちの店を投石したりして破壊、暴力行為を働き、傍若無人に我が物顔で徘徊する様子がテレビで放映された。まるで国家が崩壊し内戦が続くアフリカのどこかの無法者の町のように、オーストラリアとはとても思えないような光景だった。急遽、夜間外出禁令が発令されたが、どこまで効果があるだろうか。

スポーツ、政治、芸術などで活躍しているアボリジニーの有名人もいるが、アボリジニー問題は、平均寿命の著しい低さ、崩れた田舎のコミュニティ、生活保護率、自殺率の高さ、飲酒、ドラッグ、都市周辺の犯罪増加、ホームレス増加、一部特権のアボリジニーの汚職など、状況は深刻である。

彼らがオーストラリア国民、市民と認められて以来、政府は多大な援助、補助を費やして、数十年取り組んできたが、解決には程遠い。

アボリジニーの声 国民投票で否決 オーストラリア人の本音？

昨年、アボリジニーの意見を政治にもっと反映させようと国民に問うた国民投票があった。労働党政府や、公共放送ABCは、アボリジニーの声を取り入れることに賛成のYESキャンペーンを大々的にはった。テレビや新聞を見る限りNOは言いにくい雰囲気だった。

しかし実際投票の結果は NO が過半数を占め、アボリジニーの声を優先的に聞こうという主張は否決された。

一部の特権的アボリジニーに対して反発があったのか、また鉱山利権の絡む土地返還をこれ以上増やして欲しくないビジネス界の意向があったのか知らないが、アボリジニーの政治家の中にも、NO という人もいた。

私の周辺のオーストラリア人の中には、「もう十分アボリジニーの声は聞いている、これ以上特別扱いすることは彼等にとっても良くないし反対だ。」という人もいる。

この否決は、行き過ぎた社会的弱者尊重、少数派重視、社会分裂を招くような極端な多様性の風潮に疑問に思う平均的オーストラリア国民の本音、意思表示とも考えられる。

日豪の人権感覚の違いの一例～スキンシップはだめ

オーストラリアでは 14 歳までの親の子供への監督責任は大きい。

例えば小学校では、校外を一步出れば、親の監督責任となるので、放課後、親が子どもを出迎えに行くのが普通。また朝も始業時に先生に引き渡すまでは親の責任となる。小学生を子供だけで、留守番させることはできない。

教員や、学校関係で働くには、まず警察の無犯罪証明書が必要である。

これは子どもの安全が第一で、特に子どもに性的関心のある小児変態性欲者から、子どもを守る意味もある。

チャイルド・ポルノは法的に禁止されており、例えば、もし教員がインターネットな

どでアクセスし、警察(サイバーポリス)が証拠を掴むと、それだけで教員は即免職、刑罰対象となる。

学校では生徒のトイレを、大人、教職員が使用することは禁止されている。これも子どもを小児変態性欲者から守ることを意味する。また教員や大人が、生徒用のトイレを使用しないことは、「李下に冠を正さず」で、教員自身を疑惑から守ることにもなる。

日本から見学や参観に来る学生や、教師には、校内のトイレ使用の注意と共に、毎回子どもを触らないこと、スキンシップは厳禁であることも伝えなければならない。

西洋社会では、家族や、恋人、親しい人とは、キスやハグが普通だから、スキンシップが一般的と誤解している日本人が多いから要注意だ。特に男性は子どもを触ったりしたら、小児変態性欲者と間違われても文句は言えない。

この背景には、かつてキリスト教会系の学校やスポーツクラブで、少年少女が年長者、教員、聖職者から性的虐待を受けた事実が、ここ 30 年次々と判明し、高名な神父までも逮捕されたことがある。オーストラリアには犯罪の時効はないので、事案発生から数十年後に逮捕、起訴もある。

人権にも当然優先順位がある。一番の最上位は乳幼児など、生存を全面的に大人に頼る存在や、子どもたちということになる。小児変態性欲の犯罪は、重罪とされ再犯の可能性も高いので、出所後も足に GPS をつけられ、学校や公園に接近することは禁止されている。彼らが学校に接近すると、警察から学校に緊急連絡が入り、生徒は校内緊急避難をすることになっている。彼等の人権は子ども達を守るために制限されている

ことになる。

乳幼児や子どもの安全と命を守ろうとすれば、これくらいの厳しさは必要だろう。

オーストラリアは戦後 GHQ の指令で日本に作られたアメリカ式の教育委員会はない。学校教育の監督、教員採用、研修、カリキュラムなど教育庁の管轄になるが、いじめとか、校内暴力など、深刻なハラスメントなどは警察扱いとなっている。

また教師は子どもが親から虐待、養育遺棄を受けていると判断した場合、親には相談せず、州政府機関 Child Abuse Report Line (CARL) に直接通報する義務がある。通報を怠り、もしものことがあれば学校側には大きな罰金が課せられる。私自身、2回 CARL に連絡をとったことがある。後の対応やアクションは CARL の専門家が協議して決める。

いろいろな違った民族が集まり構成する移民社会は、性善説より性悪説とも言うべき決まりの社会だ。様々な起こりうる事態、最悪の場合も想定して、ルールや罰則を明確に決め実行していかないと、対立と分裂が深まり、社会の運営と存続が困難になるからだろう。

漫画『はだしのゲン』は小中学校ではダメ～暴力、性表現に厳しい学校現場

日本の映倫のランク付に似ている RATING は結構厳しい。子どもに対して、暴力や性的な場面のあるテレビ番組、アニメ、ゲームなどの規制は日本以上だ。

以前、広島の人から「はだしのゲン」の英語版をいただいたので、勤務先校の図書館に寄贈しようとしたら、司書から「これは小中学生には残酷すぎて、図書館には置けな

い。15歳以上の高校生ぐらいからならだいたいじょうぶと思うけれど」と断られた。

日本では「はだしのゲン」は小学校でも置かれているというが、オーストラリアの基準で言えばテーマが重すぎ、残酷性が小学生には過ぎるということになる。日本では平和教育教材として小中学校で使われていると言ったら、司書は信じられないと言った表情だった。

また「クレヨンしんちゃん」などは、下品な性的な表現で、これも小中学生には見せられない。日本のアニメブームではあるが、オーストラリアの生徒に日本の漫画アニメを見せる時には、オーストラリアと比べて暴力性、性的表現の規制があいまいな日本の漫画は注意が必要である。

学校における性教育でも14歳以下では、保護者の同意が必要だ。保護者が受けさせたくない判断すれば受ける必要はない。昨今のLGBTQの教育も、例えば、トランスジェンダーを呼んで話を聞くことなどは、子どもの身体と精神の発達段階を考慮して、この段階ではまずあり得ない。私立校はキリスト教教育を掲げる伝統校が多いので、男女別学も多いし、公立校よりさらに慎重である。

オーストラリアは同性婚を認めたり、大人の性的な表現は日本以上に自由である。シドニー最大のお祭りは、LGBTQのゲイ・マルディグラで、世界各国から観光客やLGBTQの人たちが集まりお祝いするパレードでも有名だ。

しかし子どもの世界は全く別で、子どもを守り、混乱させないことの方が、LGBTQの権利より優先する。学校側も子どもの立場や、保護者の意向を尊重する良識を持つ

て対応しなければならない。

これらは一例であるが、日豪で同じ概念や事柄、例えば家族関係、人権、多様性、少数派の権利、学校や教育の在り方、結婚離婚、LGBTQ、ポリコレなどでも、言葉は同

じでも、中身の考え方、現実の対処の仕方はかなり違うことが多い。

以上何かの参考になれば幸いである。

(アデレード日本語補習授業校校長)

第 85 回定例研究会報告

2024 年 3 月 9 日 (土) 14:30 – 17:00

於：成蹊大学 と Zoom ミーティングでのハイフレックス

研究発表

英語教育における英語劇と英語落語の意義の比較 —英語教員養成科目における可能性を視野に—

藤吉 大介

英語劇は、学習指導要領解説外国語編にある言語能力の向上における「創造的・論理的思考の側面」、「感性・情緒の側面」、「他者とのコミュニケーションの側面」に焦点を当てて指導する際に効果的な方法の一つとして挙げることができる。また、従来の教室英語では、対話形式の教材でも、生徒の発声が朗読調で、現実の会話と比べて極めて不自然であるというような感情表現を伴わない発話練習もしばしばあり、このような点の向上にも英語劇は有効だ。しかし、本格的な演劇に取り組むことは、教員にとっても学生にとっても負担が大きい。そこで、同様の効果が期待でき、実施可能なものの一つとして英語落語がある。英語落語は文字通り日本の伝統芸能である落語を英語で演じるものである。本発表では、英語教育における英語劇と英語落語の意義を確認し、その意義を比較した。さらにその比較から、英語教員養成科目における可能性を考察した。

まず、英語劇の登場は明治時代に遡り、それ以来英語教育の範疇において現在まで続いていることと、英語落語は、1980 年

代に桂枝雀によってその端を発し、現在では中・高の英語の教科書にも取り上げられていることを紹介した。次に、英語劇と英語落語の意義を確認した。英語劇は佐野(1990)がその意義を述べている。①コミュニケーションに関わる心理的要因を強化する。②「聞く」「話す」言語活動としてすぐれている。③非言語的手段と結びつけて英語を理解し表現する。④場面や文脈の中で英語を理解し表現する。⑤英語での自己表現力を伸ばす。⑥楽しみながら英語を学ぶことができる。⑦生徒に英語学習の目的意識と成功感を与える。⑧AET (Assistant English Teacher) との共同作業の絶好の機会となる。以上の 8 点である。また、英語劇の授業内の実践にも、短時間でできる活動から半年などの長い期間をかけて練習や訓練をするもの、他人との協働を大きく必要とするものなど様々なものがある。本発表ではこれを大別して 3 種類に分類した。一授業内で実践できる「短時間で演技・暗記の少ないもの」を「劇活動」、Readers Theater に代表される朗読劇のスタイルをとった「長期間で演

技・暗記の少ないもの」を「RT」、そして、英語劇の「長期間で演技・暗記の多いもの」を「一般英語劇」とし、この3種類の比較も試みた。英語落語の意義は、藤澤(2010)が述べている。①英語の十分な量のインプットとセリフの定着率が非常に高い。②英語のセリフと体の動きの一体化が可能。③自然でリアリティのある英語を身につけることができる。④人前で英語を発する自信を生み出す。⑤一人で練習することが可能。⑥「笑い」のユニバーサルな点やローカルな点の発見。以上の6点である。

最後に、英語劇と英語落語の意義を比較し、考察した。形式や目的などそれぞれに

異なる点はあるが、英語劇も英語落語も英語教育において、ほぼ同様の意義があると結論付けた。そして、英語教員養成科目における可能性も英語劇と同様に意義があることが確認できた。今後は、教員養成科目における英語落語の具体的な実践方法について検討したい。また、英語落語を英語教育に導入したことによる効果についての調査や英語落語の継続が英語力にどのような影響を及ぼすのかについても考えていきたい。

(東京実業高等学校教諭
2024年4月より
東京都立産業技術高等専門学校准教授)

研究発表

ツバル語における所有表現の特徴 — 『ツバル語辞典』編纂中の気づきより —

橋 広司

発表者は、2018年よりツバル語の基礎語彙および文化語彙研究に取りかかり、2021年にはその成果物のひとつとしてオンライン版ツバル言語文化辞典を公開した。このオンライン辞典は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所附属情報資源利用研究センター(IRC)による言語文化資料の情報資源化プロジェクトの一環であり、現在も補助を受けながら更新中である。今回の発表は、辞典編纂中の気づきのなかから、とりわけ「所有表現」に焦点をあてて論じたものである。発表は、①HAVE言語・BE言語の所有表現、②ツ

バル語の所有表現、③名詞の譲渡可能・不可能分類(A/O分類)の順でおこなわれた。

世界の言語には、「所有」を表示する際に、主に所持動詞を用いるHAVE言語と存在動詞を用いるBE言語がある。たとえばHAVE言語である英語では“I have two children.”と所持動詞を用いるところを、BE言語の日本語では「私には子どもが2人いる。」と存在動詞で表す。「所有」の概念の成立条件は「近接性」と「支配性」であり、この両方か少なくとも一方が確認できる状況が必要である(上山2009)。両方が十分に認められる場合には、英語では

have を用い、日本語でも「持っている」と所持動詞を用いる。しかし、どちらか一方が欠けている場合は、HAVE 言語では所持動詞を用いるが、BE 言語では存在動詞を用いる傾向にある。

ツバル語には英語の have、possess、own に相当する語がない。そこで、「所有」を表現するにはつねに存在動詞 “isi” を用いることになる。E isi saku motokā. (I have a car : ある／私の／車)、E isi se naifi i tena lima. (He has a knife in his hand : ある／ナイフ／彼の手に) という具合である。そうであれば、究極の BE 言語ともいえるツバル語は、「所有」することの意識が希薄なのかという推論が立つかもしれない。

ところが、以下のようなツバル語の A/O 分類システムをみると、上述の推論がやや短絡的であることがわかる。【A (譲渡可能物)】・ほとんどの物質的な所有物、取得／紛失可能な物や属性。【O (譲渡不可能物)】・身体部位。・所有者と密接に結びつき、所有者がその存在を依存している物・属性。・相続によって取得される物。

・衣服や装飾品として着用される物。・身体に密着して使用される物。・ほとんどの感情と感覚。・その存在や幸福が所有者に直接依存する物や属性。

この A/O 分類を所有概念 (近接性・支配性) の成立条件からみると、以下のように考察できる。つまり、主体に密接に関係しており (近接性+)、得たり失ったりできない (支配性-) もの、すなわち「元来自身に備わっているもの」「自分のかかわる系譜上において重要なもの」「生きる上で必要不可欠なもの」を他人に譲れない所有物 (譲渡不可能物) として O の標識でマークする。これにより、その他多くの譲渡可能物との差別化をはかっている、ということである。ツバル語は「所有する」ことへの関心が希薄であるとの推論は、現地での生活を通じて発表者もしばしば感じるところである。しかし、A/O システムによって、彼らはそれほど多くない本当に大切なものを「所有物」とみなしているのかもしれない。

(金城学院大学准教授)

講 演

「言葉」について考えてきたこと

杉本 真紀子

私は元々、東京都公立中学校国語科教員であり、その後学校管理職や教育行政職員等を経て、令和5年3月、東京都稲城市教育長を拝命した。本報告は、学校管理職、教育行政、英語科を専門としない教員経験者という視点から、「言葉」について考えてきたこと、英語習得について抱えてきた課題意識、「言語活動」についての学校教育における実践をもとに、日本の公立学校に通う子供たちに、多様な人と協働する力を育成するための方策について考察するものである。

まず、日本語を巡り、私の本報告の考察に繋がるいくつかの体験を述べる。中学生時に日本語の「助詞」の存在を認識したこと、日本語のリズムや短い言葉の中に豊かな情景や心情が詠み込まれる古典和歌に惹かれたこと、高校生時に古代人の心情を理解しようと古語の言葉の理解に努めたこと、そして古典助動詞のもつ表現の豊かさを深く認識することなどがあった。

その後、国語科教員を経て教育委員会指導主事となり、幼稚園担当として、幼稚園を訪問する機会を得、子供たちの会話から、人間は成長とともに思考を抽象化させていくということを実感し乳幼児期からの成長の過程における人間の思考力の高まりは、言語の使用によるものが大きいのではないかとの思いを得た。

さらに中学校長となってからは、国語科の学習をもとに、各教科、総合的な学習の時間、生徒会活動、学校行事等において、生徒が言語を活用する機会の充実に努めてきた。

また、学校管理職経験後に入学した大学院において、海外への教育視察の機会を得た際には、外国の人と認識を同じくして意見交換するためには、話題としたい教育制度等について、「概念で語れる」ことの必要性を痛感した。

次に、英語を巡っては、近年、外国人と交流したり情報交換したりする機会をもつようになり、英語のネイティブとの対面場面では、雰囲気には押し寄せ聞き取りが思うようにいかないという悔しい思いをした。一方、英語を母語としない外国人との交流場面では、互いに理解できるように配慮しながら英語を用いてコミュニケーションをとる体験も得た。

これらの体験から、私は、言語に関する学習の基本には、「自分の思いや考えを適切に表現しようとする」「相手を認める・受け入れる、積極的にコミュニケーションをとろうとする」「広い視野をもとうとする」姿勢と意欲が必要であり、その育成のためには多様な人々と試行錯誤しながら英語を活用しコミュニケーションをとろうとする機会の設定が有効であるとの考えに至った。

令和 5 年度、稲城市の各小中学校では、「一人一台タブレット」を活用し、考えを可視化して共有する言語活動や、日常場面を想定した英語による「話す」「聞く」活動の充実に努めている。

令和 6 年度に向け、さらに、児童・生徒

が自分なりにコミュニケーションをとりながら英語を楽しむ機会の設定、具体的には、近隣大学等への留学生との交流活動の推進等、さらに工夫した事業の展開を目指していきたいと考えている。

(稲城市教育委員長)

事務局だより

1. 会費納入・名簿整理について (重要)

会費の納入をお願いいたします。本学会では 2020 年度より会費納入は銀行振り込みに限らせていただいております。なお、お振込みにかかる手数料は会員のご負担になりますので、ご了承ください。お振込み時に発行される「控」が領収書に代わるものとなりますので、改めて領収書は発行いたしません。研究費処理などで問題が生じた場合には、本学会 HP の「会則」第 5 条をご覧ください。幸いです。

https://www.ajelc-academic.com/_files/ugd/68b70d_9f40b98972a54732a8a636ce07312f0e.pdf

書面での領収書が必要な場合は、事務局までご連絡をお願いいたします。

一般会員 4,000 円
学生会員 1,000 円 (院生を含む)
賛助会員 8,000 円

銀行口座：三菱 UFJ 銀行
国分寺支店 普通 0132870
口座名：日英言語文化学会事務局

2. 名簿記載事項について (重要)

名簿記載事項に変更がある方は、事務局までお知らせください。特にメールアドレス

を変更されている場合は、すぐに事務局 (ajelc@hotmail.co.jp) までお知らせください。事務局から案内や Newsletter をお送りするたびに、宛先不明で戻ってきちゃうメールが複数ございます。ご本人からお申し出がない限り、新しいアドレスにお送りすることができません。どうぞ協力のほどよろしくお願い申し上げます。

3. 第 19 回年次大会

第 19 回年次大会を次の要領で開催いたします。

日時：2024 年 6 月 8 日 (土)

場所：成蹊大学 3 号館 3-501 教室

および Zoom のハイフレックス

13:00 開会の辞

13:00-13:10 会長挨拶

13:10-14:40 基調講演

「生成 AI 時代に英語教育が果たすべき役割－異文化理解に生成 AI は役立つのか？」

金丸 敏幸 (京都大学准教授)

14:50-15:35 ミニ講演

「さまざまなテキストで生成 AI・オンライン翻訳サイトの翻訳力を考える」

小川 貴宏

(成蹊大学教授・本学会会長)

15:45-16:15 名誉会長講演

「日英のことばと文化(1)－雨と傘について」

奥津 文夫

(和洋女子大学名誉教授・
本学会名誉会長)

16:15-16:20 閉会挨拶・諸連絡
16:20-16:50 会員総会

4. 定例研究会での発表者・講演者募集

定例研究会は、3月、9月、12月と、年3回の実施で、発表者および講演者を随時募集しております。自薦他薦は問いませんので、事務局までお知らせください。なお、

発表は会員の方に限ります。

2024年9月の定例研究会は9月14日(土)14:30より開催を予定しております。9月の発表をご希望の方は、5月末までにご連絡をお願いします。

会員執筆の書籍出版のお知らせ

会員による書籍が出版されました。

・岩崎永一 『プラトン主義の言語学—日英語分析の数学的基礎—』 三恵社, 2023年12月 ISBN: 9784866938769 3,850円

・水澤祐美子 「第3章 状況にふさわしいことばの使用」 「第12章 英語の多様性: World Englishes」 川村晶彦編著『グローバ

ル社会の英語コミュニケーション・ハンドブック』三省堂, 2024年2月 ISBN: 9784385353579 3,850円

書籍を出版されましたら、広報通信委員会までお知らせください。掲載する内容は、書名、執筆者、出版社、ISBN あるいはASIN 及び価格とさせていただきます。

編集後記

みなさまのご協力により67号発行の運びとなりました。ご協力いただき、心よりお礼申し上げます。今年は殊の外、桜の開花が待ち遠しく感じられました。近年では珍しく入学式に桜が咲き誇り、新入生や保護者の方が満開の桜の下で記念撮影をしていました。その様子を見ながら、新入生の大学生活が実り多きものを願い、学生たちと数年をともにする教員として、身の引き締まる思いがいたしました。(Y.M.)

AJELC Newsletter 第67号

2024年4月30日発行

発行人：小川貴宏

編集：日英言語文化学会 (AJELC) 広報通信委員会

発行所：日英言語文化学会

(〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1 帝京科学大学 馬場千秋研究室内)

E-mail: ajelc@hotmail.co.jp